

第17回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



高校生の部 優秀賞 受賞作品

『十六年間の私』

東京都
和光高等学校
二年 天野 サスケ

十六年間で私の

和光高等学校 二年
天野 サスケ (あまの さすけ)

私のキャッチコピーは「変化し続ける」。

生まれつき聴覚障害を持つ私は、十六年間日本語を「翻訳」し続けている。音から形へ、形から意味へ、そして心から心へと。

幼稚園の頃私は気づいた。自分は他の人と違う。会話はできず、声に出しても届かない。音を知らない私にとって、この世は「無」そのものであり、その世界に住む私は「幽霊」だった。

ただ、やるせない私の気持ちにも理解者はいた。それは曾祖母だった。補聴器をつけた幼い私に、曾祖母は口を大きく動かして、ゆっくりと話しかけてくれた。「だ・い・じょ・う・ぶ」唇の動きを見つめながら、私は言葉が単なる音ではないような気がした。

小学校で辛い経験をした。授業中に先生の声が聞こえず返事ができない私を、クラスメイトたちに「無視している」と誤解され、ついたあだ名は「変な子」。孤独の中、私はまた幽霊になろうとした。

文字には色があり形にはリズムがある。この感覚は自分だけのものだ。私はそのことを誇らしげにクラスのみんなに言った。自分の声がよく聞こえないので拙い発音の日本語だったが周りは理解し羨ましがった。私は無から「特別」になった。

少し時がたったある日、手話を教わりに地域の手話サークルに行った。初めて知った手話は「ありがと」。左手をお皿のようにしてその上へ右手をおきお辞儀をするように下げる。私に伝えようとする温もりを感じ、そこには文字では表せない立体的な感情があった。その日から私は、三つの日本語を行き来するようになった。耳で聞く日本語、目で見る日本語、手で表現する日本語。まるで一つの楽曲を異なる楽器で演奏するように、同じ意味が全く違う美しさで響く。私は「ミュージシャン」になった。

さらに時がたった中学2年生の夏、大好きな曾祖母が末期の癌と診断された。私はその現実を受け入れたくなくて病院に行けなかった。ついに曾祖母も危ない状態になり急いで父と母とお見舞いに行った。曾祖母はひどくやせていて白かった。今にも泣きそうだった私の手を曾祖母は弱々しくにぎって私に言った。「ありがと」。補聴器越しのかすかな音と、唇の動きと手のぬくもりが一つになって完全な「ありがと」が生まれた。すべてが重なった曾祖母の言葉は魂がこもっていた。曾祖母はその後、静かに旅立った。私は今にも力が抜けそうな自分に力を入れ、前を向こうとした。もしここに曾祖母がいたならそう思っているはずだから。

私は耳が聞こえない子どもたちへのボランティアをしたことがある。「言葉は声だけではない」という曾祖母の言葉を伝えるために。まさに私は「言葉の翻訳者」だ。私は変化し続ける。時には無、時にはミュージシャンとなり、新しい私に出会う。これから色々な壁にぶち当たるだろうが、私は常に変化し、のりこえていく。それが今の生き方であり私だから。